

春駒 (はりごま)

宮中の節会せちえの行事に由来とされていますが、養蚕の予祝よめいに関係があるとも言われています。

新春の門付け芸で、正月から三月にかけて各村の家々の門口に新春を寿いで回ったものですが、今では結婚式などのお祝い事などで、縁起を担ぐものとして披露され、親しまれています。

今日、春駒が何らかの形で伝えられている地域は、山梨、沖繩、群馬、静岡、そして佐渡が知られています。佐渡でも相川・野浦・新穂など限られた地域にしか残っていません。

地方と舞方

地方じかたと舞方まいかたの二人一組で、唄と踊りを披露します。

地方の唄と舞方のアドリブを交えたセリフを交互に掛け合いながら舞います。

舞方には二通りあり、木製の大形の馬の頭を胸から下げ、

馬の尻を背後に付けてまたがるような乗馬型(男春駒)と、小形の馬の頭を手持って踊る手駒型(女春駒)があります。



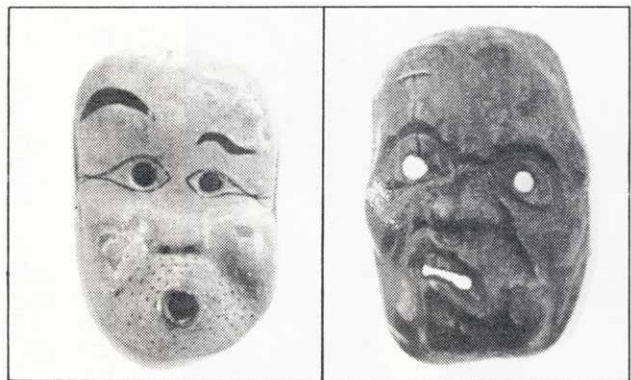
男春駒の馬



女春駒の駒

面

男春駒の面は、佐渡金銀山の全盛の頃の山師みかたの味方たじまのかみ但馬守の顔を模したもので、女春駒は但馬守の奥方の顔を模したものと伝えられています。



女春駒の面

男春駒の面



舞方



地方



【参考文献】
本間雅彦「春駒の文化史」、『佐渡相川郷土史事典』、『図説 佐渡島』